

ご親教を
いただいて

満井 秀城

念仏者が、社会の課題に、どう関わっていくべきなのかは、きわめて重要です。

ただいまのご親教でも、「武力紛争、経済格差、地球温暖化、核物質の拡散、差別を含む人権の抑圧」など、具体的な課題を明示してくださいます。そのいずれもが、「世界規模での人類の生存に関わる」重要事項であり、何もせずに放置したら取り返しのつかない事態へと至る課題です。

課題の大きさにたいする面はあるとしても、今まで、ともすれば、凡夫や他力を口実に、何もせずにませようという体質に蝕まれていたのではないでしょうか。このたびのご親教は、もはや、それではすまない、という厳しいお諭しと受け止めます。

思い起こすのは、『歎異抄』の次のお言葉です。

おもふがごとくたすけとへんこと、きはめてありがたし(註釈版聖典p.334)。「思うように助けることは、きわめて困難だ」という今の文言から、問題への取り組み・解決に向けた努力をただちにあきらめてしまい、揚げ句の果ては、精いっぱい努力しようとする姿勢を、自力とか偽善とかの言辞をもって貶めてきたのではないかと自省するのです。

確かに、私たちの力は微力です。しかし、このことは、二つの方向性を内包していると思います。

一つは、私が救おうとするのは、みな、阿弥陀如来の救いを伝え届けることで出遇った一人ひとりの内に、悲しみや苦しみを超えていく力が生まれます。このことが、「あらゆる人びとに、阿弥陀如来の智慧と慈悲を正しく、わかじやすく伝える」とのお諭しであると感じています。二つ目は、自らに救う力がないとの事

実は、何とかしたいという思いから生まれた悲嘆なのであって、救う力がないからといって、阿弥陀如来の智慧と慈悲に、わざと背くことは、決して許されないとのことです。それが、「そのお心(阿弥陀如来の智慧と慈悲)、筆者注)になうよう私たち一人ひとりが行動する」とのお諭しです。

凡夫にあぐらをかいて何もしないのが他力ではありません。如来の本願力を身に受けて、その他力のエネルギーを、置かれた状況と能力に応じて、できることから精一杯に努めるのが他力念仏者の生き方です。

このたびのご親教では、特に親鸞聖人から門弟に宛てられたお手紙を現代語訳の形で引かれています。「阿弥陀如来のご本願のお心をお聞きし、愚かなる無明の酔いも次第にさめ、おさぼり・いかり・おろかさという三つの毒も少しずつ好まぬようになり、阿弥陀仏の薬をつねに好む身となっておられるのです」とのご引用(原文は註釈版聖典p.339)です。

「無明の酔い」は、臨終の一念まで消えることはありませんが、だからといって、凡夫悪人に居直り、思いのまま、煩惱のおもむくままの生活でよいはずはありません。

「おむす」に対しては清浄光、「いかり」に対しては歡喜光、「おろかさ」に対しては智慧光という「阿弥陀仏の薬」によって、煩惱まかせの身が、しつしお心を恵まれるのです。お諭しにある通り、煩惱を克服する生き方へと方向性が変わっていくのです。

この念仏者の歩みには、もうこれだというゴールはありません。返しても返しきれないご恩に報いる念仏者のご報謝とは、真実に導かれる不断の努力をもつてするほかないのです。

このたびのご親教を通して、念仏者の自ずからなる厳しきに向き合わせていただき、今生の生活の指針とさせていただきます。

(みしい・しゅうじょう=浄土真宗本願寺派総合研究所副所長)